

開國起原

伊 5
2110
27



特
2110
27



開國起原卷二十六

北地定界之談判上

嘉永六年十一月十七日阿部伊勢守相渡

評定所一覽

海防掛

大目付

目付

魯西亞使節書翰和解

魯西亞帝の「アゲエタント。セ子ラール」

名官兼水師提督。魯西亞帝の全權。兼

魯西亞東洋海軍總督「ホウチヤチン」

名人此書翰と大日本の執政小呈

日本國大表乃示告を受て全權之レを領知して

魯西亞より差出せられたる問題の報告の爲め日本

政府の高官を煩はせられたるに對して是に對し

し御意とも此乃大故の爲めに大邦の政事を妨

海舟書屋

く不足らざるを思ひて再び「レイクスカンセ

リイル。ガラーフ名官子スセルローデ名人乃書翰中

載る所乃諸件の會議を建てるべきと請ふ

右書翰よりして執政高官已に魯西亞帝乃志

願を明かすへ一歩一小兩國の境界と確定を

するあり此分劃ハ往時相分ちるる曠漠の地小

人民を植ゆるに由る方今兩國此境界互ひに

相連接するを以て最も緊切なる一事と見せ

此の如き境界の不定なるを「エトロフ島小

係り願ふ思慮を費する由故と見るに至る

日本北方に在る「ラルリ」諸島に往時より既に魯西亜に屬し且其支配たり「エトロフ」島も亦此諸島中の一にして「ラルリ」人に此に住居し且つ一部を日本人も雜に住居を加へ魯西亜の漁民往時より既に此島に棲居せし是れ由て此島魯西亜に屬す然れども日本に屬するかの疑問を生じ此故に全權と日本政府の高官と會同して此疑問を決せしる兩帝國の境界も亦定まらざる

「カラーフ」名 壽子スセルロオデ人乃書翰中載る所乃「カラフト」即薩摩唯野人に住居し其住

海舟書屋

民を魯西亜に支配し仰き制教及交商ふはしき者たり故に魯西亜帝の命令して此三箇月來魯西亜に所領し且つ許多の軍兵を置いて是に備ふ漁獵及他に商業を為し且つ時節を期して已むる住家を構ふるが為めに「カラフト」島即薩摩南部「アニワ」港に來る日本人の寡少なるを唯々全權の言はる所の理を資し加之右日本人「アニワ」地名に住居するに方って魯西亜領民の如く其保護を蒙るる成趣し

「カラーフ」名 壽子スセルロオデ人乃書翰中第二件

於て魯西臣政府の志願を述べ、日本國と通商を結ぶ所あり

日本政府して冬須物乃た先及他の事件の爲に日本も来ふ所の異船も其入港を禁ずる所ありと既不明なり且つ入港の船隻漸次も其數を増え至て今日も亦於て候來爲し来まは如く償を受ふ事して須物を與ふ所と爲し得ふ所を難かる所なり又日本の豊富を論せば豈幾多の須物を給し得ふ所とあらんや

海舟書屋

夫も何れの國民と雖も其須物も償ひ得る事乃有餘ありし金貨と出さるべくして是を受く所者亦少くは是亦必無きの理あり而るに日本も於て其港にて食料及他の須物も交易を許さざれば必要ありとせば是自ら一箇の通商も是然らば又諸物の交易を許さずとも決して他も障礙及び危害を生ず所とある所からん

此の如き問題を出る時は諸物と交易を爲す由て國民も活養する要物を費さざる所託して日本政府之を拒むの應答は爲す所を以て其

帝とを總して通高と事とを海國民有り在て冬交
 易の為小此乃如き憂弊と起るべしと絶然と無記
 事なり日本政府の賢明なる制度ハ毎に通高
 と海に當て其民をして是ら為メに毀害を受海
 小とかわらしむるの法を建たざる處し若し一
 度通高と許す時を日本政府小於て異邦の人と
 關係する事と常に拒むの煩累ありハ其苦却て
 遠小少のつ海し

魯西亞軍艦及高船の日本港小来海と特小緊切と
 あり其故を日本魯西亞と最も相通通せるを

海舟書屋

以て魯西亞船乃日本港小来ふと他の外國より
 冬頗ふ多く且又「カムシヤカ」地名并小北亞墨利加
 中魯西亞領及「カラフト島」即薩哈連小航するときは其
 船必日本海岸の近傍に來海を以てあり

已上載せざる緣由あり小固て日本政府より魯
 西亞高船及軍艦入泊の為及諸物交易此為メり
 少くも二箇所の港口に定むるべし乃許容を得
 るべし甚切要なる事知ふべし

爰小願ふ所ハ緊要の事件小方ッて容易く政府
 乃高官と應接する為に江戸通傍の南地小

て一港と定先んを長崎ハ江戸より遠く隔
遠外陸地あるを以て是も通せ他の一港ハ魯
西亞小島も通過せぬ「エゾ島を定めんと欲請
ふにあり

此二港と定むる後諸件乃章程と明約を以て
を得るし即ち商法の規定を建て又歐羅巴人の
不滿意の諸般の定則及此の如く純へく豫メ
熟考と得ぬと不可の事情と深く尋あり全權望
らく冬日本執政乃高官魯西亞臣民と日本人と
交を結ぶるの避くるらと係と知ふにハ今

海舟書屋

魯西亞より差出せる問題の適當あると領認分
給ふとあらん事を請ふ又日本政府より乃報告
及び總て其會議の於て魯西亞の如き大國乃全
權を甚任し應し相當ある禮儀を以て待遇せら
るるべきと疑と容とを係あり

千八百五十三年十一月六日 即我十月十八日 フレカッ

ト船ハルラス 号 長崎港に於て

アチエタント。ゼ子ラール 官名 ホウチヤキ 官名
カビタイン。ロイテナント 官名 ホツシイト 官名

十二月廿四日 對話書之内

使節

魯西亞國於西も隣誼連綿と打續さるる
一々儀之心持候所而申立以交易儀諸荷物
く多寡精粗港々運上金等迄急速に調相
成兼候段と勿論く事之可有之乍然隣國
信義打續き候に當節より二ヶ所
港丈と沙圍と不被成下候而も此親睦に趣
意相絶へ候に是存殊に販賣地は外國人
窺寄と防きいたは差出至候守兵等時月相後

海舟書屋

之候得て逐々其土地に居馴深引拂兼候場合
二可相成致然ル時争端と起るに基小も可
相成哉之舟是又来春中之經界取極に成下
候方之存候

左衛門尉

一貴國儀ハ諸邦之風俗地理と研究以多し居
候事故別段申迄も無之事之に持共當年迄も
最早條日も無之儀唐太鴻工ト口フ鴻等如
何以多し来春中被急以もの之有之候哉萬
々熟考可江致候

使節

一右島之江前掃方出越々相成候之及申間
 敷定而江隨後之内江遣々相成候儀と相考申
 候此方之船出賃一申上以得共三七日之内
 彼地迄迄度着津可致以尤江前掃方出越々
 所存之候ハ、大船取寄可申左以得共出寛ヤ
 小江乘船出来以多一可申萬一外國之船江
 乘組之儀江禁制之候ハ、所國之船と蒸氣船と
 為挽候而も差支無之候

左衛門尉

一申立候通々相成候事之候得共此上も御紀都
 合直敷儀之候得共夫等之儀相叶ハ、小
 島周り申候旨併逐一尤之申分ニ而感心之
 外
 無之候

使節

一右等之儀江執政方江申立之相成候ハ、定而
 江開濟相成候儀と考へ申候

左衛門尉

一其許共申立候通相成候得共都合之敷儀之既
 之兼知致居以得共先日其船江自分共打連發

越候節も此地に兩奉行の所國法に於て而難
相越譯合有之に杯申如く聊に事之而も俄に
之崩し如く趣定も省之事故信以某等飛立
候程に存居ら而も其國に船に乘組に杯申俄
に執改達に申出候迎相叶候とも不立候矢張
陸地往返致し京師に奏聞に經其地に大臣に
申付矣々々申數相裁不申候而も取極難に事
情故某等甚苦心に致は不處に而候
使節

海舟書屋

一國境に俄に差定延引相成候得て此に調に節
極而此に數に事とも相生し可申に只今より
察知被仕候

左衛門尉

一爰是に摸振思慮以多しに改前も申聞に通
某に於て而も飛立に如く存候得共何分申數を
裁に候丈に裁に不申候而も難叶筋に省之尤
可成丈に急速取裁りに裁に運に何事にも
取計可申所存に付爰迄に間を可成扱至候
裁致し度此返翰外に俄に臣下に身に取一
已に決断を以換抄難及事故此苦情に推察可

被致候

使節

一 此返翰も拜見候當節、此摸取に尚今日限、
 此申開に趣に而、義知に仕候に然重き此後、
 攝怒に此地迄此越相成、只々此返書に此意味、
 合懇切に被仰せらるに而、此に怒折角此下
 向相成候此譯合私共おわて、甚々會得難に
 仕と存に

左衛門尉

一 此返翰の意味聊に而、心取違に、原旨に而、

折角に此思召も相貫き、不申事に付是返、
 申論に儀にも有之何分、輕き扱柄に者、疑下候
 而、大切に此趣意相届兼候故、甚々怒に、此
 地迄被差下に儀に者、之候

使節

一 此返翰に表に而、一向取留に、き此文意而
 已に相聞申候、右に而、我國政府於而十分、
 此返答にハ奉返同敷候

左衛門尉

一 我國に風俗に元より、兼知に儀に存候間、再三

申開口迄々各之候得共此度京師小美一諸大
名小使尋も可者之三乃此手續迄被仰遣候と
盡一小事一候而之由挨拶被及候事之候間尚
此返事一趣勘辨可也致候

正月六日彼船は持参左々兩通相渡り

カラフト島と我國所屬と存居候處此度對話
一節南寄り方の一我國所屬と被申開口哉と
候得共外國彫刻一地圖とも九半島五十度一
處を以境とせふも相見候得と進而見分の者

海舟書屋

羅越候迄々境一俄迄是難致候事

正月

筒井肥前守 畫押

川路左衛門尉 畫押

哈喇土島。意全爲我屬。迄今次對晤。言其南
端獨屬我。試看諸邦所設輿圖。且有限半島
五十度者。故巡吏未還之際。疆域難定也。

魯西使節に應接仕り趣申上り書付

筒井肥前守

川路左衛門尉

荒尾士佐守

古賀謹一郎

當地に渡来し魯西亞船に候に付去丑十二月
 中兩度町便を以申上候後同廿四日廿六日廿八日
 とも使節にも乃西使役所に呼出對話及候處
 申立し大意を去丑十月中一旦退帆し節差出
 候書面し條件同條に而エト口フカラフト二
 島に境界と定和親を結ひ交易と用ひ并彼國

海舟書屋

に船に薪水食料を求乞船修復等し島
 所國地ありて漢を同度しに候に而エト口フ
 冬百年前彼國に所屬し有之候を五十年來
 所國に而法所置有之候得共當時彼島に者共半
 ハ魯西亞に屬し候間半嶋を以境と致し可申
 カラフト冬素々彼國所領にも無之を彼島に
 者共近來魯西亞に相屬し右南寧に方と
 所國に屬し候場所も有之境界不明殊小ア
 ニワ港邊外國に者共窺察致し候情形も相見
 甚懸念に付使節 所國地に渡来し後魯西亞

本國ノアニワ港防守ノ兵卒差渡置ル程ノ儀
境界深ク相分リ候後

浙國所屬ノ地ニ毎相違ルハ、守兵早速為引
拂可申候得共急速取極急之而シテ追而シ難
引拂場合ニ可至ニ付早々取極度又々當今天
下ノ形勢相変ノ者無シ通シ相親不申候而シ
難叶時世ニ付交易を困ミ隣交ニ結ビ度又彼
國ノ船ノ度々 浙西近海往來致ルハニ付而
シ薪水食料を求め船修渡シた先松前箱館等
ノ内并江戸近海次大坂迄ニ而滞船ノ儀不聞

海舟書屋

度其條近來 浙國所武備亦薄ク以松子ニ
相見當今天下ノ形勢を以考ル得シ實地安否
難在茶場合ト奉存ル可夫々急速に備有之度
次第ニ寄候而シ此加勢トモ仕ルルハ減種ノ
弁ニ加シ申論ルハニ付此近輸ノ此趣意を以厚
申論又々申互方不都合ノ慮々々夫々及辨論
候得共何事ノも三五年ノ時月相付ル儀ニ
難相成所願ノ條々此立不被下候而シ以ハ
追々難引拂由を以三五年ノ儀を殊更ニ相
難シ直ニ此子前次方ニ可申立杯申立ル儀ニ

而一併カラフト嶋に俄魯西亞之而多年心懸
居候趣彼方書籍にも相見

和文に俄奉使日本紀行小アニワ小居立候
日本人防守に用意無之候旨アニワを返す
此に播ふ事跡に小あら次小乃前を奪ひに
而も日本に而取返に小配と改めしうふ趣
しこの趣書載有之に

此即守兵を差遣至に阪ハ全境界を極方小可
寄交易に所願強而申立若此に用ひ無之即
カラフト全島と棄ひに計策専らに小阪を盡

海舟書屋

候俄と相争一旦退帆に節差出に書翰に之
カラフト嶋に土蕃共魯西亞に改化小随ひに
之付魯西亞帝に命小用り三月以前に其地を
取し先數箇に軍營をも備へ候し其外認有
に全彼に所有と仕成候文阪に付此儘に捨置
是候而も可奪有之必然に俄に兵力を以事戦
おし追拂に俄に出来可申候將共急に極寒
不毛に土地之而是迄松前伊豆等に差遣置候
警衛に人数も冬分小至候將に引拂に由小も
相聞一旦も取戻に而も兵力を以堅く相守り

以俄之都而擬夷地以警海向十分相整以上之
各之而之難在叶地形之有之其上此即根之兵
革を動し以而之時月を以延被成以以趣意も
空敷相成候俄之舟根小舟兵差遣候俄も察度
おらひ彼ふかゝるても辭相屈し以根子之候將
共猶彼是中華元未使節し中分一ヶ條も不相
立候之付近くレサノツト見合も有之カラ
フト之有毎之暫く差至存外子近く異愛と生
し大患と引出可申哉も難計と後未之書源公
配器立候も擬夷地之俄之出立以前左衛門尉

土佐弓に被仰渡り趣も有之當早春見分り者
をも被差遣候答之付右之趣意差合カラフ
ト境界取極く俄と

和文カラフト鴻之俄南寄り分而已

冲國所屬と申張り右之付慥小按之可仕書
留等更之無之は將共外國彫刻之万国地圖
等再應取調り至五十度之四十度近く異同
之有之候將共九半島五十度近く至之以境
と以ぬし趣も相見其方小相成り候

冲國小附屬之地不少殊之使節船小有之候

一キリ不板地圖之も同根相見候哉之由彼
 船と通辨之して差遣以節通詞森山榮之助
 竊小見受来以唐魯西亞人共中文之勢之付
 地境之相定不申候之も凡小見當を附是不
 申候而之忽首名各物之可置以之候之必
 定之付毎降候取調之上追而境界相定之候
 追之先之其通り相心將居我之旨急度申
 諭異好之毎之根子之首之候去之八日書
 面差至外國之地圖取調不引届候之旨之候
 同一概小信用難在禁故之趣之申外一置出

海舟書屋

帆仕候儀之由症也

追而之由沙汰之可相成之勿論之候將共見分
 者被差遣以海之此一條計も畢竟彼之申之と不
 以捨置此節之追之由取懸可相成姿之而聊使
 之面目も相互候儀故自餘之慮之兼伏為致候
 手限之も在来以候之其限申諭其條之條件也
 ト口ノ為然

沖國所屬之異論毎之薪水食料之去之寛年之
 法書付も有之素子細も毎之筋之付漂流之候
 毎相違上之相與一遠之積和親交易并湊之困

候儀之何事も追而沙汰之候趣意猶之愈
合ふ候所共此役所かゝて双方打搦談判
かゝ候節之多人敷之中故殊更小氣勢を張
免角甚度之枝葉論を起し結局相成兼候程
以上成殊月迫年始之も向ひ呼出方爲支候折
柄之付右見込申論一廉々此返翰并先達奉伺
置以論書之趣を基本といたし此趣意了不違
根葉語漢文之書面取調去月晦日以来此勘定
組頭中村爲彌此徒目付此普請役此小人目
付等差添魯西亞船此差遣種々爲申論候處晦

日羅越此砌彼方へ追而交易甚外此極相候候
節之ため之差出置候由にて右書面漢文之認差
越此之付一覽此處交易所免者之以後之儀
を被是と勝之候之取綴以書面之而容易受取置
候儀難相成以間當日二日尚又爲彌若遣取書免
度候要殊之外立腹いたし然る上之直に出帆致
し候由申立類之勢立候程子之相見以是爲彌
一旦奉付之之差圖受持系以是候書面差度
不申内冬寸分も其度之動以成之不相成間出
帆之儀之勝之次等之可致旨急度申達以是却

而穩之相成測辭を直し品々丁寧之取扱皆在
在別段封し置し此手前扱方は書面若出封
し儘若出候様申上り候に付受取之翌三日若
し蘭語一通私共宛之而差出候間翻譯為致し
承晦日差出は漢文書面同様之に相見候得共
一旦若し通取計は後し候且之元來退而取
極も有之候節はため申上り候由に付受取
し相成候は之も強而し差支も有之間敷却而後
來は計し種とも可相成候に付其後更に並前
書書面し趣を以再之論弁し上測兼伏為致書

付相渡遣申候然し當四日彼々彼船に來り其
可申左候し心持に相成候様器一覽に入度其
外序外より申聞し品も可有之哉し由申越感
意を難計し候共及新万一億しは相違候而
も以し外之而且之彼方を疑ひ候しも在り却
而氣受も如何に殊更に之輕之而計平常巡
見位し候之し而私共一同彼船に居越候に殊
し外恭敬と盡し丁寧に馳走以多し右其如
未外國に通高は差免之も相成候しし魯西亞
を以始とし且又外國々は通高は免相成候時

亦有之候節之彼國之隣國之儀之付交易筋共
外外國同取取取取有之度之儀願出子細也
毎之筋之付兼屈覺書可差遣者中約之付右
之外願筋申立之儀之旨中步其節大砲并帆
掛外之調練或之蒸氣之迅速之陸地毒走
以多之候車之雛形阜上之江形之為延見
世右之而都之事濟之相成候間同七日西沙役
江呼出之餐應之付且先達献上物之付江未沙
受取之申儀ハ不申達候將共献上物等江之節
相當之返物之候積土佐之伺濟之趣也有

之返物と申之之儀之付も出帆之付別候
被下物等毎之儀如何之付長崎奉行申談使
節始及物其外江下置之儀取計之付一統難有
拝願仕万事毎差支事濟翌八日出帆之儀申出
其砌書面差出之度候間受取之者同日五才時
差越其儀申立候之付長崎奉行之附通調等
差遣之儀肥前守左衛門尉之付壹封大澤豊後
守之付一封相渡之同日九才時出帆江候儀
此度候都而今般之儀烈々然合之儀而之
物別之江候之付外以多之付も毎之候之儀

差延之由趣意之兼伏為仕以也之成丈穩之取治
 允候間十分之申伏也俄等之出來不申候得
 共一度冬カラフト全島を奪エト口ヲ半島も
 所領之如く申成既小治手前次方之書面迄差
 出以済共右之趣意之相改め追而差出以書面
 小 沖國絶終之界エト口ヲ鴻及ひカラフト
 アニ口港口とくと認有之右書面冬和約之儀
 品之認込有之候故差戻以儀之候得共彼之
 申條相屈之由右之而顯然以多之其所於而
 之 沖威光相立充大休之由趣意取失候儀之

海舟書屋

勿論都而沖体裁小相拘り以儀冬此症片去反
 覆冬常儀之戎狄之癖之由症候間少之油野
 之不相成儀之奉存候
 一カラフト島アニ口港之魯西亞守兵居立候上
 之時宜之寄當春旬季次第松前伊豆守之人
 數差渡之可申哉一旦追拂候儀之出來可申
 候得共左以而之時月之延候由趣意之差障
 以儀之勿論容易之兵革改初一万一差誤有
 之候而之 沖國威小相拘り以儀之出來可致
 哉も難計以之間右等之趣早之松前伊豆守之

心得方被仰會此上穩使之相感合右地所取度
候松之由所置者之度奉召候

一前書之通カラフト島に見分るもの可差遣
越中少至の間當春早々見分る者江遣松江
度依而見分る者とも魯西亜守兵に出會
候可有之要双方心得違ふ万一争鬪
以松之面之折角之由趣意も空敷相成可申之
付使節中諭守兵共見分る者へ對し聊々禮不
法致間敷旨使節守兵に差遣以書面魯西亜
文存書封者譯し蘭文壹通とも為差出以處

海舟書屋

右之暫時も雖差延候之付去ル四日町便を以
石河土佐守松平河内守に申遣猶同日定便を
以右様文字本書蘭語譯和解共差遣荒増候
申上候儀之由症候

右應接之始末取調候趣書面之通以症由尤出
立已前左衛門尉土佐守に被仰渡候趣之而
當春最早擬夷地見分るもの由之被 仰付候
頃合々奉召以將共前書カラフト一條不容
易次第之付此節見分るもの不被差遣當一ヶ
年も其儘被成是松之面之彼島之再ひ

二二
沖國所首々々相成申間敷殊々北地々荒海旬
季々寄渡海も六ヶ敷可有之旁未々見分々者
出立不被仰付渡こはハ、早々出立は作付候
松奉存候依之度々々對話筆記七冊論書如三
冊役長より山々松方ハ是出ハ書每方々松
方ハ是出ハ書每方々松方ハ是出ハ書每方々松
後相陸堅要々々和解十冊奉使日本此行書板
一冊相陸長崎書乃中流々上此流中上ハ以上

寅正月

海舟書屋

アニワ港の中魯西亞軍役の支配人ハ其ハ

魯西亞と日本乃陸會の事ハ就て予日本官府
乃全權と高議を成し其故由ハ就て當年冬
間ハ日本よりセガリエニ島掛りの一役人
アニワの港ハ遣ふ魚ハ是其地ハ在係交の日
ハ乃領分を見分々々為りあり而して在れ役
人此書翰と汝ハ渡す魚ハ
右の役人及ハハ附屬の人々を最懇切ハ接待ハ
而してセガリエニ乃地ハ於て彼の見分を許
きんとを請ふ

當春亦於て予暇日を待て予自らアニワ小到
不慮し然らざるハ予亦伴ふ一船を其地ニ送
ふ

帝國日本の全權乃為先小書也

アジウタントセ子ラール官名兼ヒーセアトミラール官名エホウチアチン

二白アニワ島名小遣人冬日本官府乃一役人あり

第百七十一号小派汝按小魯西軍役の支配人の番号也右役人より相

應の禮儀を以て接しつきあを請ふ

千八百五十四年正月十四日 我嘉永六年丑十二月二十八日

長崎小於て

海舟書屋

フレガット 船名
バルラス 船名

嘉永七寅年正月十六日阿部伊勢守松前伊豆守と相渡
覺書

魯西亞國より蝦夷地之内に上陸し者も有之候
由右より外小野心より筋等無き旨長崎表に於て而
彼國使節の書面差出候間此方より呈示し候
等仕急事論に不及候彼地は可申越候に在道々
蝦夷地経界為見分候べき者は差遣候答に付
其以前萬一此方より者と魯西亞國より差遣候

者と聞評等差起候而も以て外に事こは間其
旨能々差遣至候家来に申論は早に可べき
候事

但右に夷人の先達を雇出候「グシニコタン」
は上陸し者こ而魯西亜人の可有之と云はる

日本國全權欽差大臣顯貴諸君に奉ふ

日本全權大臣より正月六日小贈を給へ海書翰
乃中小歐羅巴にて製せる諸地圖に依る小薩哈
連の經界ハ其中央五十度ありしと云はる

海舟書屋

俄羅斯全權大臣謂らく歐羅巴の地圖以て
此地の稽查を盡すものありされハ此等乃こ
小至て冬接て證とるを小是らるは俄羅
斯人を除く外ハ歐羅巴人の此地小至る者あ
らる故小俄羅斯人及び日本人乃居住を不可
を何處の地してありやされと定むる者あり
次唯俄羅斯人の之務て此島と探討し方今
小至りて冬俄羅斯乃所領道小五十度以南小
及て是唯薩哈連の南端の之日本國小屬と
くして此會議乃始て冬日本人これ小居住

せり

俄羅斯全權大臣おもつらく筒井肥前守操川
路左藩門尉孫ハ政府より任じ所の權全
ら次是を以此餘の會議を取らば益小屬
且船艦のよに就て上陸せよ海小と免れ
ふら故り速小長崎を出帆

全權諸君安福ふして速く江都小還りたまひ
俄羅斯政府の願を務て早く完成と一々周旋
し治らんといれ俄羅斯全權大臣の切り希ふ
所あり事故の妨ふき時を俄羅斯全權大臣當

海舟書屋

春の中ふ北海小航し再び日本小来海一々因
て日本政府境界と定むるの如何を問ひ且交
易の交り完成と爲らるるや又俄羅斯全權
大臣より此老中へ贈る書翰中ふ載せたは
事俾り就き速小決断を望らんと欲と
全權欽差大臣の命を奉りて

カヒテイーン、ロイテナント 官名ホスシート 人

一千八百五十四年

二月廿四日
二月五日

フレガットパルラス 船名 長崎小於て

魯西亞使節出帆の御差出候書面

の紙に付申上り書付

筒井肥前守

川路左衛門尉

荒尾士佐守

古賀謹一郎

別紙申上候當地に渡来し魯西亞船去り八日出帆の節差出の書面翻譯為致一覽仕り申上候箇條當時差掛の紙八紙之候將共右の内彼國所願の箇條可成文の差急相成度并右件の

海舟書屋

此決議の旨兼知はため彼方から差支も無之候し、當春の内北海に航し再び

所國地は可居越との文面相見右ハ河是の地は居越の紙可有之哉推考からひ是候候との所産は將共北地に航し候と有之候上との奥地との所産候哉を奉存し右在等と紙其外河次と申置はる異國船の常の候由通詞共物語候間必との難仕る去右書面と通弥渡来はる其被是申上候も有之其向より相伺候とも其為肥前守左衛門尉の意而書付をも相渡候

儀之付彼方申立之條件未評議可及此
也每之候同當地かゝて肥前守左衛門尉中達
置候通評議法決定之上追而何事とも此
汰可有之旨之書取其向之此後之差歸
相成可然哉之奉返以右之長湯奉返も談判
之上此合之為魚而申上至以上

寛正月

松前并蝦夷地此用之儀之付

内密申上候書付

海舟書屋

堀 織部

村垣共三郎

松前并蝦夷地此用被 仰付以申追之取調於長崎
表魯西亞使節應接書共外共被成此下一覽熟
慮仕候魯西亞使節之追之申立之趣も有之
何事之也 所國之而境界此調有之段彼方は
相審不申候而之此不都合之可相成然而之唐
太島之儀之松前伊豆弓此居書面并世上取沙
汰等参考仕候書昨年七月以来追々民居補理

砲臺等取建候哉之も相分私共彼地參着頃之
之最早土着仕揺動仕間委哉之推察仕候也長
崎表應對論談中唐太南岸之所國地附屬之申
題ハ兼伏仕候相聞既之巡見此役人被遣候
得之丁寧之取扱ハ使節ノ鴻胥之書翰差
出同所廿四日應對回答之中北地境界之儀之
追々申立候通時月を經我國ノ者古土地小居
別添ハ相成候而之迎も為引拂ハ儀難相成
場合之至必定貴國ノ及事端之候相可相成旨
何事小も来春之申立合之而取極候方之致

度旨申立猶亦廿六日對話ノ節申立以之
貴國ノ三月四月頃迄之此役人出役無之候
ハ、我國ノ彼土ノ人民ノ植付可申迎も際
限も亦く相待候儀之難致候間何事之も此役
人ハ差遣早々此定可旨之旨役々申上書面之
認入旨之候間此上此後之相成以而之強業
ノ疑を相増可申之奉存以留此度ハ遣候由勘
定此後目付等當月下旬迄之出立為仕以得之
三月中之松前ハ參着五月中之唐太ハ渡
海可相成之奉存候也右ノ者共ハ場所見分致

一取調候迄之而夷人應接等之不仕無程上彼
 一者羅越以故申步置引續私共居誠見分仕其
 一節彼方彼人共も迎候ハ、應對も仕可成丈復
 一古く論之申諭ハ、何事之も歸府言上之と挨拶
 一と来春可仕旨申聞引分是可申と奉返候
 一兼々及兼候處唐太鴻之儀と蝦夷地とと指別
 一風土も違ひシラヌシ。クニエニコタニ運
 一上屋有之古く場所より三四十里之間住居之
 一夷人漁産之品在場所ハ持来り分抱と受居候
 一分も自然所國地附屬之と相違も無之丈も奥

海舟書屋

地之方もヌメレニクル。ヲロツコ。タライカ
 一等之種族居住以多ク以前之滿州に隨從以た
 一ト從來滿州製之品之右シラヌシハ持来り所
 一用地中も年々交易以多クハ儀之有之ハ如何也
 一ト時ハ魯西亞に附屬仕ハ哉何事も右種族之
 一所國地附屬之と難申強而所國地之仕候而も
 一往々此手之居兼ハハ必定ハ儀前書シラヌシ。
 一トシエニコタニ是も所國地之是之北方僻遠
 一ト離島彼より南方之迫地之此處候間地續
 一ト而境界相立往々不取締之相成ハ而ハ相失

解之此役候間唐太之儀と魯西亜に被遣候而
 も可然哉蝦夷地ソウヤを限十八里之海峽を
 界之以爲しエトロフ、クナシリと御國地と相
 定ウルツフとの間を界之仕候得と御國界取
 と相分所置次第何れにも取締仍居可申
 哉左候得と来春山も境界此定と上とソウヤ
 邊之此固と土着と姿之而此便宜も有之候間
 先是迄と通松前伊豆吉に被 仰付丈と増人
 數相加エトロフ、クナシリ二島箱館湊等と速
 と御用地と被 仰出南部津輕と此固人數差

海舟書屋

渡出役共丈と此摺交代又と越年等向と都合
 と寄進と此治定相成候り、此地此取締筋此
 度相立可申と奉存候

一私共儀と来月下旬に立仕松前表到着と上
 彼地為来と唐と島と兼糺と丈と西蝦夷地
 海岸通見分仕五月下旬にソウヤ迄履越先
 達而相被候此勘定此徒目付と取調候指子兼
 里唐太鴻に渡海仕クニエニコタンと而魯夷
 應接仕右前文と次第相合取計と操次第直
 と東蝦夷地ニヤリと邊に履越季候も宜敷

候ハ、エト口ノ島迄渡海可仕右順季迄是ハ
侍之先達而遣之候支配向方當時之形状兼
至東海岸通箱館之巖出同所ノ南部領佐井
渡海仕候侍之年内一卜先歸府仕候相成可
申哉之奉存候

右之件之河是也見越之候之侍共彌被地系
着之上之品之臨機之取計も可首之候間兼而
此合江下置以松仕度猶也時勢之就之彼地
松子等侍之勘考仕以是也為未之通之而之連
も此取締行届申間敷此程此國境此調之候也

海舟書屋

仰出幸之此機會にも奉存候間寛政之此旧法
之沙儀一被遊蝦夷一圓往之移風改俗之此仕
向首之度私共分量之忘積年勘考仕至候事共
一時申上盡難之右此全業此切驗之候之是亦
見越之候之候間此今逐一申上兼以侍共仍未
之此成否之初發之此見据之固之候事故此度
此所置之大綱書面申上以廣之内之此書取を
以被仰渡之松仕度三百里外遠境に居候一々
伺を經候儀難叶此治定之此下知不奉伺以而
之品之此半之場合之相成十分之取計出来仕

間敷候旨此段密々申上候以上

宣二月

堀 織部

村垣與三郎

下札

唐太島之儀之實地巡見取調之上猶又少
差因可奉伺以済去奉文中上以通彼我入
組殊俗混淆仕以而之故不取締之基旁以
見切以割愛之方之奉存以在去大山巨嶺
又之湫湖河川等相隔且人路通難之地險

海舟書屋

8

等程能き方位之有之候以之其邊之而分
界仕候而も可然哉又通之沿岸之船路
間通く通く可く間品々後弊も可者之哉
之奉存候但均交彼方へ被之候之も又是
之地方之從來我邦之物之定候後之遣及之
何方之物とも不相分引渡以之其名目格
別之相違仕候事故何之之道精々論談仕
是迄有来之形之復一候上之而經界取予
之儀之及一可申と奉存候

書面に趣は申すに通見越に候に付方今河
難申候間西人は相越地勢甚外共得と熟考
上尚又可被申候カラフト島と捨可申との
論一應は、毎ふ事候得共容易に魯戎は差
遣候に、殊蠶食に心と長し且蝦夷地のため
藩籬と矢に姿も有之候間可成に立来に通居
置申度旨去右等と味に至り候而に實に不容
易候間其得矢とも深く思慮と盡し候而追
而可被申候に且地境に候塞外に事故全く

海舟書屋

所國境相定候とも自ら固しからざる姿も有
之候間時と勢も乘候而取極に而可然候に、
直に取極候振とも可被致に事

蝦夷定疆に候東方に地にエトロフと限り候
候に文化度は評決に通に相定北地唐太島に
候ハ全島に割愛に候兩人申立候得共一醉唐
太島に文化度は固拓に知もは在締志にと相
立不申哉從來松前家にも此度境界お定に
候とも不相聞呂々産物取捌會所納屋等南岬

邊小補理年々四五月頃より七八月迄漢業く
品々其外とも取互のた先役人差渡し支く取
調秋末に至り一同ソウヤに帰船猶又来夏に
役人差渡し趣ふて素より概夷人接育土地開
拓く見込も無之全く交易産物専務く場所小
省之近來追々繁盛罷成諸方く船く唐太南岸
に幅渡専ら取引致し裁小も傳少仕候間只今
唐太不致魯西亜人の引渡候而も概夷人との
論都而差支く筋可省之是迄松前家持場運上
納屋會所等く場所と所國地と相定ノ其餘

と魯西亜持場と相定此方小て冬全會所産物
取捌所而已と相定得此度聴と經界相定仕候
共是迄く振合小て別般守兵等不差益ソウヤ
邊く清國冬申立候通土着く姿之而松前伊豆
守に也被 仰付可然哉之奉存に其外概夷地
法取歸向く候之付寛政く由舊制之江為樓候
概兩人申立候と尤く次第之者之何レ小も右
見込く摸概之由要革年之候而も後來く弊害
迎も此防方者之間敷く之付右く心得と以概
夷地所開墾く趣とも得と勘弁仕巡視可仕に

三
被仰渡可然奉存以私共評議仕以書面之
通之而候則以下之書面活動之所に相廻し
此段申上候以上

大目付

目付

大日本國の貴官筒井肥前守様川路

左衛門尉様西大臣小呈候

第一月二十四日

我二月八日

我長崎港を去る小臨んで

當春北方小航は不時再び日本に來り我景際

海舟書屋

要ふ取存意小付日本政府小於て如何至至せ
ふやを認知と人ふと改告置たり

然る小今次此事を尋問とふり我希望小及し

て長崎奉行を全く此等乃附言を受けると返

答せり我此處小時日を費とて欲せさるハ

今將小北方に航し第一月下旬

第一月下旬ハ我六月九日より同月十八日

當ふ乃頃薩哈連の「アニワ港」に至ふし此地

小於て西大臣の内一員小會し共に其疆界と

定むふとを謀らハ我望之誠小是より然る

小我既に往時西大臣小告は道理小由ふに

此事件を決して遅延せしむるを以て若
し両大臣乃内一員も彼地に来會せしむ時
兩帝國の疆界と検査劃定する事ハ已むべし
を済む唯我一人の之小帰はし蓋し精細小
疆界を定むる由て其最近鄰せし地ノ在て
友帝國臣民の親交及貿易小繁まる規則と建
ふ時期と復遅引しむるを日本政府小
於ても已不能く領知と爲し
此等ノ事ニ於て日本政府も素より其信を
踏之總て貿易及ひ其他ノ諸件小然て他の國

民小准は應し所乃規定ハ魯西亞臣民の爲小
も亦急て允准を受んとを要し
魯西亞及ひ日本に界と其地を見分せし後
兩帝國の疆界ハ何等の地小互は應しやも當
其小事りて日本政府小知らしむし
是ら爲し江戸海口小素ハ甚容易の事也
然れ共我力乃及ふ丈を和親を調ふ事ニ意
を盡し且両大臣の所望と心小記し其を以て
此仍小在て冬江戸海口小入らば他乃一港を
據ひ其都と距ふ事遠からざる要小至は應

一而して此地小於て両大臣の到るを待り最
後の會議を了せんとは

我輩今日本海を航するに已小二年小至
若日本政府及小遲疑して三年小及ハハハ
時日本政府特小自己の為乃之から以我輩
乃為小亦夥多の困難を起しハハ然る小是
小及ハハ兩帝國同小在ハ親交乃約定を為
冬方今避く可らざるの時勢小して是を定む
不時冬徒未躊躇して安んせざる事件も皆
能其結局と得て諸事道理小合ハハ順序を

海舟書屋

受る事とある處一

希く冬両大臣我ら極めて尊敬意を致し乃誠
を受け給はんことを

エ、ポウチヤ子ニ親筆

真譯

カヒテイニ、ロイテナント
若

ホスミイト

千八百五十四年第四月十三日
三月十八日
フレカツト船ハルラス

寅十二月九日

伊勢守殿内談之趣

魯西亞人の應接方之儀之付而之退々被相伺
及差圖候趣も有之ハ將共猶又萬々合考熟意^慮
致し候至唐太全嶋之儀之今般堀織部正歸府
猶申立候趣も有之ハ其之も本邦所屬之終
之無之相見尤村垣共三郎少も委細兼知之通
之事之候同嶋ハ魯西亞人相越ハ之全々近來
之事と相少一辨彼國と本邦と境界相接ハ之
隨申立候之何とも不審之儀之付右之趣厚々
相合唐太全嶋之本邦所屬と相合將ハ其精々

海舟書屋

力を盡し可被申候を彼國ハ應接之儀之委任
之事之候將共所國境を分候儀之至り候而
之不容易儀見込之通系リハ將之直候將共萬
一各理之所國境之分候儀之至りハ而之世界
萬國之對し 所國威之強弱亦拘り候儀之
付再三再四如何に被骨折ハ而之此上之り各
宜早之之盡し方之之と一同決着ハハ、條約
取極候以前ハ之之も猶又被相同候に可被
公將候事
以書狀致語上候然モカラフト之儀之付被仰

越以詔義知以多一伊勢守殿法内談以症以法
書取をも懇覧以趣意く詔拜兼江以實之沙
汰く通カラフト全島日本く物之相成候し
可然候得共何分ふも左指く應接と六ヶ交可
省之と奉存以尤再三再四申張以迄く成出来
候筋之は得共物不度と申以西被以筋と不
江行筋と省之は初より無理と相多し候を申
愈以と 御國くまけを求候譯之而支も中方
之寄白と淺黄位之も如何振之も相成候得共
黑白相應之相分り居以候と再三再四く申
兼

候儀其上無理を強而申懸以ハ、彼方之而合
点致し不申而已あらは 御國く儀と見透候
而往々く以損多相成可申哉然の之分り以別
之證據も毎之候を無辨之可押付とをり以ハ、
此度ハ條約之止之以多一歸國次第別段軍船
差向萬と以愈合可申杯品之寄以ハ、戦争不
も可及俾之申立候も必定之省之否之例く威
し之も可省之候間勝之次第と挨拶江以相相
成候得之直以故共追くアメリカ人神奈川に
来里以見合も省之且冬偽との之共難見据候

故其儀と差支候間先待異以振と申振之而之
彼方附上り右之乘一外之條約迄を自由小
破里可申哉と當惑罷立候

以委任と申候而も此儀杯不申上容易之
挨拶仕候而も追而大争端を鬧以之勿論
左も無之由而も文化之乱妨迄之儀江戶
近海に集り候而致され候而も取返も無之
甚場之至是條約と定以節之十二分ノ勝手
と申上ト口フカラフト昔小江奪以而も致
方無之候

尤指別之此世話を以追々海防改備之相立候
得共異國と戦争いふ以而も此差支無之振
相立候儀之十年前後も相立不申内之此形
屈江為互回致哉之付此節此儀強之被仰是候
儀之此愈念之儀之れと申當春無墨利加之
條約其外段之魯人之函達之趣有之候之付此
節之至り品能申延之申も難相成以之付カラ
フト之儀條全鴻附屬と仕條約書之不相認カ
ラフト島之仕来之通りと申趣意之認是可申
と奉存候

カラフト境界之俄俄夷人居住之地を
所國所屬勿論之而其餘之スメレンク人
ヲロツコ人と唱はもの共々獨立又は山々
ニ支配之而魯西亞之支配と受候も乃是人
も無之候スメレンヲロツコ人等聡と申立
同島小魯西亞所領可有之謂ま之無之候間
何分しも同國と境を定め俄々難相成候
中村為彌其外之ものは厚く申合右之趣を
以再三カと盡し應接及は至山々之素々
魯西亞所屬之候杯際限も無之申幕屋立何

是之致せ異人共從來窺窺以多し地之付
彼方之不拘此方之而早速之取歸は為
立候より外致し方も無之左候得し自然所
國附屬之動き不申指可相成と云ひ之而右
之不紙譯書之通之付仕来し通之候得し沙
差支者之間敷と應接及は俄之此症は

此上大切之條難決候之候丈相同は在可仕候
得共應接之始末之寄即症之在決不申は而之
差支且はアメリカ應接之振合も有之候間此
聽置之俄伊勢守殿は被仰上可は下候此文

通之と伺之不及之意も相見に由同人の内談
書小冬可相伺と有之難相決に要何分者之譯
之付其趣を以取計可也下候右一條之此度
條約の内實之不容易事柄之付左清門尉啓三
郎の内狀之次第一同相談種々評論も以多
し以皆共別人等は遣應接新之相成に付之却
而之ら之と系可申哉是迄私共及應接に次
第之進以而之何分別之取計方も毎之候右者
之趣支配向之内重立にもの之不及申通并之
廣を以内之森山采之助了簡をも相尋候要同

海舟書屋

松申之候儀之由症候依之カラフト鴻一師之
譯書別紙を通愈此目申に右可得此意如此症
候以上

十二月十三日

古賀謹一郎 印

村垣與三郎 印

松本十郎兵衛 印

川路左衛門尉 印

筒井肥前守 印

石河土佐守松

松平河内守松

尚以何分ふも本文に始末後を厭ひ不申候
得て如何に成事之而も應接に不相成候
無之候に付以沙汰次第可取計ハ勿論之候
討とも何分にも後々不容易相察に始末前
廣具之不申上取計に而も是々忍入候旨
為宜方と見込に認心を盡し申上候に候
症に厚に勘毎に症に松奉存候以上

カラフト島に候之付取調書

蝦夷に候千馮と唱候東蝦夷地エトロフ等々方

海舟書屋

と古より日本附属之西カムサツカ迄も同根に
阪西洋翻譯書等にも相見に得共北蝦夷地カ
ラフトに方と并候ものも無之候哉水戸前中
納言殿より被遣に書面に内嘉曆中諏訪社縁
起小唐子と申事相見者今もカラフトにも
可有之哉其條日本附属之不及申カラフトに
名さへし差當古書物に無之文化元子年戸川
筑前守差上候書付小唐太島に候に寶曆始に
須迄に奥蝦夷地をりや之西山丹人持渡に品
をりふと蝦夷人持来松前々越にも乃者

於りや之而交易以爲之遣候より右寶曆年間
より松前家来と相渡り寛政の始より家居
も建増家来も差遣り番人越年等も爲致り由
相見同四卯年立花出雲守相渡候書取り内之
唐太嶋候へ候へ東西地續り蝦夷又へ其向島小
連り候島々へ蝦夷共遠り而又自ら一陸別境
を取越へ而土地も廣き事之相傳中畧素より
何方所有者地とも不相分りて其地へ夷共と
山丹等々人々と入會来り境之候深きと有之
彼是合考り得る已前より河國附屬共不決島

之付河國境等々議論も猶更有之り敷文化々
度松田傳十郎間宮林藏等は差遣りより追々
相聞山丹地之隣候次第初而相分り候へ候之付
右之譯故取歸向り候りや限り之而之切可
申と乃此書取り候り相見候書取り世話之寄當
時之如く相成り河國附屬之段分明之相決り候
余國蚕食之巧之致り候魯西人共從來窺窺
在り間少も此油等不相成筋之交しレトコ
此シレトコをタラヒカマ
シレトコ小西飛ハ
岬よりバンケへ鼻迄東北に打
廻り凡カラフト半島とも相見候地往古より

日本人曾而不相越當時以相辨居以者無之然
 不處クルセニステルと唱候蘭書其作阮甫宇
 田川真齋小此節詳小為相譯以內凡東北之方
 小漢有之大村之西韃靼人辨之も乃住居以多
 候趣之有之
此人辨之候は口モウ又モニクバン環唱以
 異人にも可省之と與三郎推考仕以 右四十
 年餘已前之事故邊地を各國乃夷相争屢變革
 以多一候之常に付此節如何相成居候哉難
 計然以之から以堀織部正村恒興三郎差上候
 書付の趣之而もカラフト奥地西岸小住居羅
 互候スメレニ人々韃靼之支配受ラロツコ人

海舟書屋

一同人種も別候之趣之而右兩人よりトツソコ
 タニウトル之儀之東西之絶險南北之分境海
 陸とも通路不自在天然之疆界と相見候間北
 陸之藩籬と以見据と有之者之四十九度より
 以川之も南之方亦て且東北之往古之里不相
 分候間暫差置今般 所國境と見据申上候コ
 タニウトルより極奥地ハンゲ迄之百里餘有
 之凡半島小も至り兼可申哉之以度候然れを
 全鴻附屬と相成以節之西洋書小右見候從來
 韃靼人之貢物相納候スメレニ人等迄も日本

附屬之無之候而之不相成其節之後日韃靼之
 彼是申候節答方も之無之不毛不治之地を相
 争候而魯西亞并韃靼人を敵小致し長く一大
 患を生し候訳之付此為筋之難相成奉存候且
 先達而長崎表於て魯西亞人ともクニエニコ
 タニ陣營取立候上之而カラフト鴻と魯西
 亞人既小取之候者之書翰差出以節之通も取
 返無覺束と奉存候要否陣營等も引拂可申由
 卜立候之從來し 所國威故之減之而海して織
 部正共三郎見込候場所一境相立候ハ、文化之

海舟書屋

頃々之指別之附屬之地西北之方は相進候儀
 と奉存候既之通頃もカラフト之指可被成
 者之建議等者之候節も後辨と相考候而左様
 之と不相成旨強而申上候儀も有之候程之候
 得共全島附屬迄ハ相當仕間敷見込應接出
 来不申候間 所國力次第之面之如何様共相
 成候振仕来し通しと申候條約之以多し候積
 之相決候事

北地境界談判向之儀之付了上書付

竹内下野子

松平石見守

京極能登守

唐太島境界は俄兼而被仰渡りは越意の基き、
嶋内アイノミスノレニクル人種台所は相分
ま居天度五十度之地を以て沖國境取極に積及
談判既之彼地は是迄度之役は差遣土人
撫育し世話も有之其筋ももの出張警備し
自當ともいふく来は儀之而今般新の事と掛
候儀之も在之現在世上流布の色分は輿地圖

海舟書屋

こも五十度を以て色取を替候儀等致引證素よ
る沖國所領之地は紛れ無之越種論談仕候
唐彼方はるて冬一併同嶋之地形は公平論
候者沖國附属之無之満別属嶋に相成在
當之而且アイノ人種も四十八度より以北か
るて見受候儀曾而無之は間人種を替はを證
と以て多し五十度と分界之地と見極は之を謂
是無之殊之同所して境と分は候而も無境に
境に付後来に混雜間断無之終小西島に紛擾
と醸し候之必然の勢に付所領之分は無之ハ

不好儀之候得共地摸取之便吾之拘ら以強之
境と分ち候而も分界無之より一層之混雜
と増し候筋故暫く下田條約之通据至以方態
親永續之基之有之深く右等之邊を考へ境と
定め候こと海峡等より葦輝と分界之地と
以ぬより外有之間を其餘附會之説を
主張いたし即今境を定候議論之涉以得こと
ニワ港を境と以ぬより方之彼是口実と設ち
去とて是迄の如く分界之論なく兩國之人民
雜居といたし置以得之往々人種と移し遲速

小拘ら以以りまも全島所領と以ぬ候計
畫淺からと相違を彼方申述に趣意八十分論
破いたし説論と加へ候得共實地亦向ひ痕跡
を押へ論判以ぬ候儀之無之候間渠より論
駁と受以得之旨送憾是亦無證據之空論と相
成詰り双方申争まで之而互之論辯際限無之
以は是實地於て分界地勢之當否取調不申候
而も論談一決難致事之治定以ぬ候時節
ら此子數相搦り候之思入候得共素々彼方底
意之全島掠奪之見込之有暇之境を極以而も

不都合之候可有之然要双方地形を調之上治
定可及旨申出以之幸之候之而引續為取替書
面案差出候之付談判數度之重詔以後全島所
領之論ハ説破以之易きに彼方口實と可相
成廉々之取消し勿論五十度之地見分之上分
界至當之地形之候滑之細無之候滑之も彼
方申出以通實小境之立兼以場所之候而之
付之右最寡山脉水路等之寄不中而以之相成
間敷其摸根次第自然五十度以南之方之も相
成可申哉其程之難計ハ將共鬼角席上之論

小て取取纏可申見据無之猶是迄之如く分界
無之候而之遂之全島蚕食之憂之受候之眼前
之候之付以付れ小も地理熟知之者被地之被
差遣双方談判之盡く聴之御國境之定め以後
難居此差拒之相成以半而ハ往々之此患害少
か不はしく哉之深く痛心仕候之歸府之上巨
細之事情可申上以將共先之此段申上置度依
之別冊對話筆記七冊相添此段之上候以上

戊辰八月十九日

魯國於て為取替の箇條書寫

第一兩都兩港開市延期之事

日本政府乃難事と寛く其爲魯西亞政府於てを一切の事件に付勉めざる意を表現せん爲め五ヶ年乃延期と兼諾を尤外各國政府於て右に延期と兼引せざる歎或ハ其代として新に免許を得る歎或を條約中変更を不事何れも於て魯西亞國於ても同様に免許と受くる

海舟書屋

第二カラフト(サカリシ)鴻境界取極之事

魯西亞政府於て此鴻の境界と定先人と其境を兼引せざるも日本政府より其境を取極めんと切小求むるに由て魯西亞政府ハ其鴻近傍の總督皇帝殿下のスタッフ隨臣のコントロールアドミラル海岸諸州の軍勢奉行シベリヤ海軍隊及太平洋諸港の指揮官兼サカリシを支配せしめルカガ子ウイツチ小要用の全權と爲ふ爲き旨を約せり○コントロールアドミラルカガ子ウイツチ是時直次

茅箱館立留コニシエル乃取次小て日本政府
より委任の人と右ノ事ニ付面談を極し

第三貨幣改鑄ノ事

日本政府於て此事ハ必要小して且外台國改
府於而も美存多き上魯西亞政府於ても兼
引セんと欲故小魯西亞政府ハ箱館立留コ
ニシエル小此合議結局多一き乃全權と共小
極し

前小載多不所の件々双方信實小決定した依
證として魯文乃方は魯西亞の副カンセリ

海舟書屋

ル官ホルス名 爵アレキサンテルコルチヤコフ
人日本文ノ方は日本大君殿下乃使節押印
名
一各通小蘭文譯と添紙譯セふもの印と調
て互ニ證とを極し

文久二年戌八月十九日即アレキサントル
ニコラウイツチ殿下即位の第八年午八百
六十二年八月三十一日於比特堡

開國起原卷二十六

海舟書屋

